

第 4 回世界都市農業サミット推進委員会
会議録

日時：平成 29 年 5 月 25 日（木）16 時 00 分～18 時 00 分

会場：練馬区役所 5 階庁議室

1 開会

2 議事

(1) 世界都市農業サミット開催計画（概要・案）について

事務局より資料 1 を用いて説明。

委員長

- ・ 資料 1 の変更点について、ご質問やご意見があれば頂戴したい。
- ・ 「世界」と名乗っている以上は、いずれ開催のねらい等を翻訳し、海外に向けてサミットに関する情報を発信していくことになる。その際、特にねらいの 2 点目は、英訳にあたって主語を明確にする必要がある。主語は練馬区であり、「練馬区の都市農業について世界から知見を借りたい」「練馬区の知見を世界に広めたい」という意図でサミットを開催しようとしていると理解しているが、現在の文章では英訳した際に伝わりにくい。今後検討していく必要があるが、現状で方針や考えはあるのか。

事務局 都市農業調整課長

- ・ 各開催のねらいに関して、英訳の際にはご指摘のあったように主語を明確にして表現する必要がある。他の言語への翻訳にあたって留意したい。一方で、日本語の文章については、主語が練馬区であることを読み取っていただけるものと考えている。

委員長

- ・ 主語を明確に練馬区とすると、他の都市農業に取り組む自治体から「練馬区自身のためか」と理解されてしまう危険性がある一方で、明確にしなければ、練馬区として期待する点と実際のサミットの内容とにずれが生じる可能性がある。今後、進めながら詰めていくことになるが、そうした課題があることを意識しておくことが重要である。

委員

- ・ 世界の方に、都市農業という概念は伝わるのか。

委員長

- ・ 私が知る限りでは、欧米を中心に、農地以外の土地において、本来は農家ではない人が農作物を作ることはあるが、日本のように本当の農家が、まちの中に残存する農地において、産業として農業を営んでいるという点はなかなか理解いただくことは難しい。その点をどう正確に伝えていくかが、ひとつの課題となる。

委員

- ・ その点を踏まえると、主語が練馬区で良いのか。「日本における都市農業」が主語になり、開催のねらいが進んでいくものとするが、いかがだろうか。

事務局 都市農業調整課長

- ・ 開催のねらいについて、主催は練馬区であり、練馬区が主催する理由については先ほどの座長の発言の通りである。練馬区における都市農業を世界に発信していくこと、また都市農業の役割が見直されているということ踏まえたねらいを作成する必要があり、「都市農業は」という主語も含め、バランスを検討する必要がある。

委員

- ・ 何を目的としているかが冒頭にくるのだと思う。練馬区というよりも、都市農業をアピールすることが目的のため、主体は都市農業にある。世界において、日本的な意味での都市農業の理解が難しいとなると、都市農業とは何かという具体的な点を出した上で、都市農業をどのように発展させていくかという話になるのだろう。

副委員長

- ・ 前回も同様の趣旨で発言したが、練馬区が主催するという点からも、ねらいの2点目のみ練馬区を主語とした主体的な文章にするのが良いと感じた。一方で、ねらいの1点目と3点目は、都市農業の今後の発展や都市農業に対する誇りや意欲が高まるという点で、国際的なサミットを実施する意義があることから、都市農業が世界に理解され、広まるというニュアンスに戻していくことも考えられる。

委員

- ・ 市民や農業者等の関係者全員が主語となる「We」になるのが望ましいと感じた。

委員

- ・ 概念は異なるが、どの都市においても植物工場等も含め農業が行われていることから、都市にある農業をどうするか、どうしていくかという具体的な論点になった方が良い。

事務局 都市農業調整課長

- ・ 都市農業の定義について、開催概要の文中に注釈として示す方法も考えられる。
- ・ 開催概要のねらいについては、英訳時の主語がどうなるかという点は重要であり、「We」や「練馬区」等、ご意見を踏まえ、再度検討し、次回の推進委員会に提示したい。

委員長

- ・ 事務局が再度整理するということであるが、同時に本番に向けた分科会における議論でも検討される可能性があるため、行き来しながら検討する余地を残したほうが良い。
- ・ 意見を整理すると、「練馬の都市農業」、「練馬にあるような都市農業」、「都市農業」という3つの表現があり、ねらいの1点目と3点目は、「練馬にあるような都市農業」、2点目は「練馬の都市農業」という整理はどうかという提案もあった。これらの提案を踏まえながらこの先の検討を進めていただきたい。

委員

- ・ 都市農業基本法における都市農業の定義は「市街地及び周辺の地域において行われる農業」であり、サミットでイメージする都市農業の定義と異なると思われる。サミットでは市街化区域内に存在する生産緑地における農業という狭義の都市農業が対象であることを示した方が良いと感じている。

委員

- ・ 一般的な意味での都市において、営農が存在することに意義があるため、都市農業を定義で線引きすべきかについては悩ましい。一方で、これまでイベントを多く手掛けてきた経験から、誰に何を訴求するのか、効果を何に求めるのか、参加者が何を共有すればいいのか等の外形的な部分を検討していくことで、やるべきことが見えてくる。

委員長

- ・ これまでの議論で示された点が論点であることを念頭に置き、進めていければと思う。

(2) 世界都市農業サミット実施体制(案)について

事務局より資料1・資料2を用いて説明。

(3) 世界都市農業サミットサミット分科会(案)について

事務局より資料3を用いて説明。

委員

- ・ 前回、分科会について議論し、住民・農業・施策の3つのテーマで分科会を進めるという方向で合意を得られたという感触を得ていたが、現在示されている分科会検討部会とは、その3つのテーマを示しているのか。

事務局 都市農業調整課長

- ・ 前回の推進委員会では、「農がつくる新しいライフスタイル」、「農を活かす新しい都市像」という2つの分科会案を示したが、再度検討し、分科会等合同検討部会で分科会のテーマを検討していただいた方が良いと考えた。ただし、本日の推進委員会では、分科会の検討にあたり、キーワードを示した方が議論しやすいと思い、参考として資料を提出した。

委員

- ・ 今回示されたキーワードに基づき、一から議論することは前回の議論が活かされていない。まずは3つのテーマで議論を進め、取組を進めながら詳細を検討していくことが良いと思う。

副委員長

- ・ 前回の推進委員会では、事務局から提示された「農がつくる新しいライフスタイル」には、都市農業の展開に加え、都市農業と都市住民の生活という2つの要素が入っており、その点を分ける必要があるとの指摘がされた。また、前回提示された「農を活

「かす新しい都市像」は、都市計画に農業をどのように位置づけるかという内容であったことから、農業施策も含めた農業、農業と都市住民の関係性や生活を豊かにするための都市農業あり方、都市計画制度等における農業の位置づけという3つのテーマがあげられていたという印象を持っている。この3つのテーマについても、さまざまな意見が出され、確定したわけではないと理解している。

委員長

- ・ 第3回推進委員会の議論を踏まえ事務局が作成した新たなテーマ案は、推進委員会での議論に基づく整理として適当であるか疑問が残る個所もあったが、本日までには十分な検討を行うことができなかつたため、具体的なテーマ案を示すのではなく、分科会等合同検討部会において適切なテーマを検討するという方針を示すことにした。
- ・ 分科会等合同検討部会のメンバーは、本推進委員会の委員が中心となることから、今後議論を重ねる中で、前回の推進委員会で出された住民の暮らし、農業、施策という3つのテーマに収まると思う。

委員

- ・ 昨年度から世界都市農業サミットの検討に携わっている中で、なかなか取組が前に進まないと感じている。一方で、方針や形を決めていかなければ、走り出せないことから、推進委員会で議論し、胸を張って活動できるような開催方針が定められていけばよい。その上で、定められた方針等に基づき、農業者は自分の得意分野やできる範囲で協力をしていく。

委員

- ・ 各分科会は、時間をずらして順に開催していくのか。

事務局 都市農業調整課長

- ・ 同時開催を想定している。

委員

- ・ 招聘者はいずれかの分科会に参加し、同時刻に議論が進むのではもったいない。

委員長

- ・ 分科会は午後いっぱい実施するため、聴衆が複数の分科会を聞きに行くことは可能であるが、オーガナイザーやパネラーは、特定の分科会に張り付くことになるだろう。

委員

- ・ 海外から招聘者がどのように日本の都市農業を捉えているのかが分からないことから、例えば都市の農業や都市の生活、施策といったテーマを示したところで、円滑に議論に参加できるのかが疑問である。
- ・ また、海外招聘者は、研究者が多いということか。

委員長

- ・ ご指摘の通り、海外からの招聘者にとっては、日本の都市農業を理解することは難しく、いきなり参加してもギャップがあると思われる。このため、各分科会の中心とな

るような招聘者については、2018年に予定しているプレイベントに参加してもらい、練馬区を中心とした日本の都市農業を理解いただいた上で、さらにサミット本番までの1年間を通じて議論を重ね、翌年のサミット本番に臨むとよいと考えている。

- ・ 招聘者は分科会のテーマによっては、研究者だけでなく、行政担当者やNPOの代表等が参加することになるため、テーマの検討と併せて、招聘者の検討も行うことになる。

副委員長

- ・ 検討部会の役割が大きいことを想定していた。報告者だけを決定する以外の各分科会の検討部会の取組内容を今後明確にしていく必要がある点を念頭に、検討を進めていく必要がある。

事務局 都市農業調整課長

- ・ サミットの推進にあたりまずは実施体制を整えるべきと考え、本日実施体制案を示した。今後は、推進委員会委員に実行委員会のメンバーになっていただき、本日いただいた意見等も十分踏まえながら議論を進めていきたい。分科会等合同検討部会では大枠の方向性を決定し、各分科会のコーディネーターと十分な連携・調整を図りながら各分科会を進めていきたいと考えている。
- ・ また、本日開催のねらいについても多くのご意見をいただいたことから、今一度、事務局で検討する。再度検討した内容については、委員長及び副委員長に相談し、各委員には次回の推進委員会前に事前配布させていただきたいと考えている。

委員長

- ・ 分科会については、住民と暮らし、農業、制度・政策といったキーワードを中心に、分科会等合同検討部会の中で3つのテーマについて議論し、次回の推進委員会までには暫定のテーマ名を提示することができれば良いが、今後各分科会での議論や分科会等合同検討部会における議論を踏まえた見直し、また各分科会間での調整を経る中で、熟度が高まったテーマ名が決定していくというイメージをしている。テーマの重複等もあると思うが、相互関係を理解しながら進めていけると良い。

委員

- ・ 都市農業と一言で言っても、その実施方法等は各都市により異なる。なかには、植物工場を都市農業と捉える都市もあることから、そうしたニーズに対してもサミットではどのように対応するのか等も検討が必要である。

委員長

- ・ ケニアの大学の先生から、施設園芸の視察依頼がある。我々としては、ハイテクな施設を見てもらいたいと考えるが、視察希望の先生からは、単純かつ低コストで、誰でも取り組めるものが参考になると言われている。このように、さまざまな見方があるため、プレイベントに参加してもらいながら、世界に対して、どのようなものが都市農業に適し、何が参考となるのかを我々も知る必要がある。

委員

- ・ サミットの開催にあたり、農業者の誇りと意欲を高めることが大事な目的であると考えられる。行政等からは都市農業の重要性について発信がなされているものの、多くの農業者は、住民や飲食店、行政との関わりが希薄であり、自身の取組が外部から評価されていることを知らない。このため、相続への対策等も含め、農業の継続の判断が、金銭的な要素に影響を受ける。委員会等に出席していると、取組が評価されていることを知ることができ、農業継続や新たな投資に対しても意欲が出ることから、他の農業者についても、世界からの評価も含め、普段の取組が外部から評価されていることや自身が恵まれた地域にいることに気づき、意欲がわき、新たな取組へと挑戦する農業者が増えるという流れが作れると良い。

委員長

- ・ 各分科会の議論の中で、必ず誇りや意欲という言葉が入ることになるが、誇りや意欲を高めるための考え方の角度が各分科会の違いとなる。事務局から提示されたテーマ案は、その点が腑に落ちたテーマになっていなかったことから、できるだけ早く、分科会等合同検討部会を開催し、先ほど示されたキーワード等を踏まえ議論を重ねた上でテーマを固めていくこととともに、誇りや意欲へどのように繋げていくかを検討していくことが重要である。

委員

- ・ いま何故世界都市農業サミットを開催するのかという点は、内容としては理解できるが、実際に生産している区内農業者がこの方向で納得するのかという点が気になる。机上の空論ではなく、生産者や商業者の立場からの関わり方等、整合性を取りながら、一緒に取り組まなければならないと感じている。

委員長

- ・ これから各分科会等で議論を進めていく中で、各主体との連携等について検討していくことになる。しかしながら、現段階ではどのように連携するか等、具体的な部分が明確ではないため、まずは走るということが重要である。

事務局 都市農業調整課長

- ・ 資料1の8ページに「(3) 飲食店、商店街、大学、企業等との連携」について記載しており、各分科会の検討内容と併せて、区内事業者との連携方法やサミットを契機とした取組及びサミット後も続く取組を考えていきたい。

委員

- ・ 実行委員会と各検討部会の両方が開催されると、会議の数は増えるということか。

事務局 都市農業調整課長

- ・ 実行委員会は、各検討部会における検討内容の報告を受け、承認をしていくことになるため、年に数回開催することを想定している。

委員

- ・ 実行委員会は年に数回開催し、分科会等合同検討部会等は別のメンバーで構成すると

いうことか。また、現在の推進委員会の委員のみではなく、新たなメンバーも参加する可能性があるという理解で良いか。

事務局 都市農業調整課長

- ・ 今後、各委員のご意見や所属団体との調整を踏まえた上で、実行委員が各検討部会の委員となる可能性もあることをご理解いただきたい。また、新たにメンバーも参加する可能性があると考えている。

委員長

- ・ 私見だが、分科会等合同検討部会の委員が最も多忙になると考えている。分科会等合同検討部会が取組開始時のエンジンとなる気がしていることから、合同検討部会で密に議論を重ねる必要がある。加えて、各分科会を主導的に動かしていく必要もある。実行委員会は、年に2回程度開催することをイメージしている。
- ・ 主なキーワード等の提案を含め、分科会のテーマ設定に向けてご意見はあるか。
- ・ 東京都としてクラインガルテンの取組を推進する意向はあるのか。

委員

- ・ 奥多摩にある。クラインガルテンは市街化区域よりも、自然が豊富な地域で取り組むのが良いと考えているが、ドイツでは街中にあり、また、東京都の都市計画部局では、クラインガルテンに関する検討は行ったことがあるため可能性としてはゼロではない。
- ・ キーワードは、多面的機能に関するものばかりで、生産者の視点や農協の役割等、本来の農業生産に係る点が不足している。

委員

- ・ 各分科会検討部会と分科会等合同検討部会において、分科会の3つのテーマが決定していくと考えて良いか。
- ・ テーマの設定にあたっては、誰に何を訴求していきたいかという点が重要となる。専門性が高まると訴求力は弱まり、また政策に落とし込むとなると、練馬区としてサミットを通じて何を求めるかについて明確にする必要がある。個人的には、政策的な議論ではなく、多くの人に都市農業に興味を持ってもらうためのアプローチについて焦点を当てることも良いのではないかと考える。このため、政策や制度論ではなく、農と住民という観点から、食糧供給や環境・防災等の機能的な面から平易な議論をすることで、より多くの方が都市農業へ関心を示すようにすることが良いと思う。
- ・ ただし、まずは、練馬区が世界都市農業サミットに期待する点を明確にしなければ、分科会等合同検討部会では議論ができないのではないか。

事務局 都市農業担当部長

- ・ 何度も会議を開催しながら、議論が進まないという意見を多数いただき反省している。
- ・ 都市農業がいかに素晴らしいかという点を、世界の多くの人に再認識してもらい、その良い見本が練馬区にあることを伝えたいということが、サミット開催の根幹にある。また、農業者や地域住民が、その価値を認識し、都市農業に対して誇りを持つとともに

に、その価値を世界に向けて発信してほしいと考えている。

- ・ ご指摘の通り、難解な話ばかりでは、農業者や市民、世界には広がらないことから、都市農業をさまざまな人に知ってもらい、また広げるという点を根幹に、分科会等合同検討部会では各分科会のテーマについて議論していければと考えている。

委員

- ・ 政策については、日本の政策における不足点を議論するのではなく、日本独自の都市農業がどのような政策により支えられてきたかという点について、世界に発信し、参考にしていただくことが重要ということである。

委員長

- ・ ある情報が海外からの招聘者に対して有意義になる面と、練馬区を中心とした日本国内の都市農業の農家に対して有意義になる面がある一方で、練馬区民を中心とした市民がその情報を理解することで、練馬区を中心とした農業者の誇りやプライドに繋がるという間接的な影響もある。これらが一つの情報から期待できる効果と考えているが、これまでの議論はこのような趣旨との理解で良いか。

委員

- ・ 分科会毎に、その効果は異なると思われ、委員長のご指摘の通りである。

事務局 都市農業担当部長

- ・ 分科会等合同検討部会の中で、各分科会の検討部会の温度差を調整していくことも重要であるが、各分科会を均一で取り組むのではなく、「取り組みたい」や「すごい」と感じる等、区民や農業者に効果が及ぶことを期待している。

委員長

- ・ 直接・間接合わせた3つの効果があるとすれば、ねらいの主語の話と連動する。このため、分科会等合同検討会でのブレインストーミングにあたっては、その点を基本的構図として示しながら、議論を重ねていくと全体の整理がしやすいと感じる。

委員

- ・ 先日、石神井にある飲食店において、練馬区産の野菜とイタリアントマトを使用したジャンルを問わない料理コンテスト「アモーレカップ」を開催するとともに、その飲食店のファン等と共に勉強会を実施し、試食を行った。他地域にも美味しい農産物があるにもかかわらず、練馬区産の農産物を食べることに価値があると飲食店やお客さんは評価する等、都市農業に対して理解のある飲食店も存在する。
- ・ サミットでは、イベントのひとつとして、前日にシェフが農地を視察した上で、翌日にその農産物を使用した料理コンテストを開催してはどうか。農業者にとっては、自分が生産した農産物を飲食店に使用してもらうことで、それを食べたお客さんと繋がり、自分の農産物が評価されることを知り、励みになる。また、飲食店にとっても、地域の農産物を使用することが店の評価に繋がり得るという流れができるとうい。
- ・ 農産物の自販機販売は、取組当初は売れ行きが良くなかったが、飲食店で野菜を使っ

てもらおう中で、評判を聞いた人が購入しに来てくれるようになった。これまでは直売所で販売するために持って行っていたが、持っていかずとも、お客さん自身が来てくれることがわかった。このように、都市部では潜在的な購入者数も多く、魅力さえあれば、販売先も多数あることに農業者自身が気づいてほしい。生産者自身が恵まれた環境があることに気づくことができる分科会のテーマ案があるとよい。

委員長

- ・ 今のご意見は、3つの分科会の1つのみで議論されるのではなく、異なる角度から、各分科会で議論されていくという構図に繋がると思う。
- ・ 美味しい農産物が全国にある中、練馬区の生産者を評価し、購入する動機はなにか。

委員

- ・ 食味だけでなく、農業者の想いやストーリーを説明書きとして加えることで、食べる人はより美味しいと感じ、評価されることにつながっているそうである。

委員

- ・ 飲食店の方から、希少価値に物語が付いた商品は最高との話を聞いた。例えば、収穫時期が限られるゆずの花を料理に使用することで、物語ができると聞いて納得した。

委員

- ・ 都市農業を続けることは本当に難しいことであり、ファンを増やすためのひとつの方策として農家レストランを営んでいる。飲食店との連携やイベント開催等、都市農業に対するファンを作るという点は重要であり、サミットを通じて都市農業に対するファンが増えていくことを期待する。ただし、ディスカッションのために分科会を設けるだけではつまらないと考える。

委員

- ・ 栽培しているトマトについて評価を得ているが、自分では他産地と比較して圧倒的に美味しいとは感じていない。客観的に美味しいと評価している人もいると思うが、なかには、練馬区で生産されたものを食べるという物語があるために、美味しいと評価していただいている点もあると感じている。

委員

- ・ 消費者も新鮮な野菜は味が違うことを理解している。普段ピーマンを食べない子どもが、新鮮なピーマンは食べたという話も聞いている。

委員長

- ・ 輸送距離が近いために鮮度が良いだけでなく、誰が作っているかという物語を意識していることに意味があるということと理解した。

委員

- ・ 客観的な情報である安全と、心の状態を示す安心の観点から考えると、国内産農産物は基本的に安全である。その上で、都市農業は目に見える場所で栽培されることで、付加価値が付くことが、都市農業の意義のひとつであり、その点をPRできると良い。

全農地のわずか2%の都市農地での生産が、全生産額の約1割を占めることから、統計的にも都市農業ならではの付加価値がついていることがわかる。

委員

- ・ 市民は種まきから収穫までの体験をすることで、興味を持ち、楽しんでもらうことができ、その結果自身が生産に携わった大豆で作る豆腐を美味しいと評価することに繋がっている。このように、食べ物は身近な場所で、自分で触り、作ることで、興味を引くことになるため、体験型を通じて都市農業や農業者のファンを増やして行きたい。

委員長

- ・ 食育や安心・安全とは、味そのものだけではなく、精神的・心理的な価値を含めた農業の価値、また近所において行われていることに価値があるという点も含め、議論していくことが重要である。

委員

- ・ 分科会案のキーワードには、福祉や食育が挙げられているように、フードセキュリティに関連するキーワードは数多く含まれている。市民にとっても関心の幅が広い議論だと思うため、フードセキュリティというキーワードを使用し、市民の興味を引くような取組ができると良い。その上で、どのようなアウトプットが求められるかということ踏まえながら取り組んでいきたい。

委員長

- ・ 海外の都市では、アントレプレナー的に農業に取り組み始める人がいるが、彼らが栽培する農産物の品質は日本のものと比べて決して高くないが、その取組や取り組んでいる人は非常に爽やかである。その理由としては、彼らが、貧困者やハンディキャップのある人、十分な教育を受けられない人等について農業を通じて世の中に発信していこうという姿勢や、世の中に対して正しいことを実践しようとする姿勢を標榜し、その点にやりがいを感じているためではないかと考えている。
- ・ 美味しさという評価に対してやりがいを感じることはもちろんだが、世の中に対する正しい行いという側面から、自分の取組に誇りを持つことも、都市農業のひとつの特徴である。最終的には、農業者のやる気や誇りに繋がると思うが、美味しいという議論だけではないという点については、分科会のどこかで議論していただきたい。

委員

先日、農業者8名で構成するマルシェのグループと福祉作業所8カ所とが集まり、意見交換を行った際、ハウスでの収穫作業は指導があれば可能との回答が得られた。現在は、パートを雇用しているが、障害を持っている人でも作業が可能であるのであれば、福祉作業所の方と今後連携していく方向でいる。パートの場合、時給で給与を支払っているが、収量に応じて給与を支払うことも可能であるとのことである。人手不足を感じている農業者と福祉作業所側双方のニーズがマッチングすれば連携の可能性があると考えている。

副委員長

- ・ 農業者が中心となってサミットを進めていくことが重要であり、分科会そのものが大きな役割を果たすような取組になっていけば、それが達成できると期待する。

委員長

- ・ まだ明確に決定されていない点もあるが、走りながら問題があれば考え、立ち戻ることも含めて、議論を詰めていければ良いと思う。

3 その他

委員

- ・ これまでは、農業・林業・水産業が個別にウェブサイトを持っていたが、東京都内の農林水産業の魅力を、観光の情報も併せて発信することを目的としたウェブサイト「とうきょうの恵み TOKYO GROWN」を開設した。農林水産業者に対するインタビュー特集や体験レポート、東京の農や林の四季の風景を公開する。また、特産物の紹介やその販売店、自然の見どころを検索できるようになっている。さらには、農林水産業の就業希望者に対する情報も公開している。新着お知らせ情報には、協賛いただいた企業や団体等が SNS を通じて発信した情報を掲載することが可能であり、PR の場として活用いただきたい。日本語・英語・中国語に対応していることから、サミット開催にあたっては、情報発信の場として活用いただきたい。

事務局 都市農業調整課長

- ・ 第3回推進委員会の議事録は、各委員にご確認をいただいているため、本日配布した内容にて公開する。
- ・ 第5回推進委員会は、2017年7月19日(水)15時から開催したいと考えている。

4 閉会

以上